

(IV-42) “近代遺跡” 評価方法による土木遺産の保存・利活用コンセプトの提案 —大分県虹瀬橋を事例として—

日本大学理工学研究科研究生 正会員 堀川 洋子
日本大学理工学部 正会員 伊東 孝

1. はじめに

土木遺産は地域の歴史の「語り部」である。しかし従来の土木遺産評価は、土木施設を「もの」ととらえた“建造物”評価であり、地域史の理解に不可欠な「土地」が評価対象にふくまれていない。これに対し“近代遺跡”の評価方法^{注)}は、土木施設を“遺跡”にとらえ「土地+もの」を評価対象とし、「土地の歴史」を重視する。

本研究は、大分県虹瀬橋(平成11年12月国指定重要文化財)をとりあげ、評価対象を橋本体の他、橋詰空間・水辺空間など土地もふくめた「橋空間」全体に広げ、虹瀬橋の歴史的価値の再評価をおこない、保存・利活用計画のコンセプトづくりに生かした。ここではその計画手法を報告する。

2. 虹瀬橋の概要

虹瀬橋は、大分県大野郡野津町・三重町間に位置し(橋中央が町界)、岡城下〜白杵城下間の白杵竹田往還道(以下、往還道と略す)を横切る大野川水系三重川に架けられた、日本で初めて25mのスパンを超えた石造単アーチ橋である(橋長31.0m、幅員6.1m、スパン25.1m、ライズ11.0m)。平成元年、大分県から三重町・野津町に移管された。右岸上流側の橋詰にある石碑「虹瀬橋記」(文政9年(1827)建立)には「文政4年(1821)1月起工、文政7年(1824)6月竣工、石工は織平、白杵藩下三重郷1万石の年貢米運送のため、白杵在住の甲斐、三重在住の油屋・後藤の3富豪による犠牲的な拠金で建立された」ことが述べられている。

3. 現地調査の実施

図-1に、実施したコンセプト作成フロー図を示す。

(1) 第1次現地調査—プレ調査

大分県・三重町・野津町の文化財関係者および大分県三重土木事務所へ、虹瀬橋周辺整備計画の基本方針をヒアリング、現地確認をおこなった。整備方針は「河川整備事業として公園整備をしたい」という旨であったが、整備案は虹瀬橋を“建造物”にとらえ、歴史的

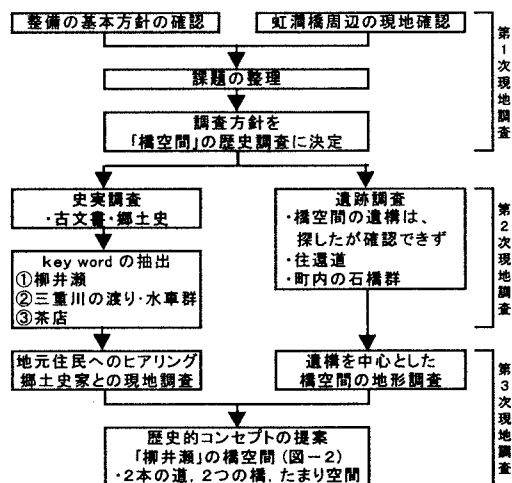


図-1 虹瀬橋周辺整備計画のコンセプト作成フロー図
価値を橋本体のみにおき、「土地」の歴史的評価に欠けていた。そこで、周辺整備計画のコンセプト作成の基本資料を得るため、「橋空間」の歴史調査をおこなうこととした。

(2) 第2次現地調査—史実調査と遺跡調査

歴史調査として、「史実調査」と「遺跡調査」をおこなった。また第2次現地調査では、フロー図にある歴史調査以外に、地域の基礎的データの収集(人口・土地利用・気象・交通量調査など)もおこなった。

① 史実調査

「史実調査」とは、文献にもとづく歴史調査である。古文書や郷土史関係の資料を収集し、「土地の歴史」に関わるkey wordを抽出した。key word1「柳井瀬」とkey word2「三重川の渡り・水車群」は、郷土史の研究論文のうち波津久文芳『三重往来筋柳井瀬渡—虹瀬橋前史三重川の徒渡道の遺構など—』(H11年)を主に参考とした。同論文には、虹瀬橋周辺の地名は「柳井瀬」(ヤナイゼ:後述)とよばれ、古文書では虹瀬橋を「柳井瀬橋」または「柳井瀬石橋」と記されていること、三重川溪谷には総数9ヶ所の渡りがあり、虹瀬橋の真下付近にも飛石橋が存在していたこと、三重川下流域の各

キーワード: 土木遺産, 近代遺跡, 土地の歴史, 保存・利活用

連絡先: 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 TEL: 047-469-5572 FAX: 047-469-2581

渡り付近には、文化年間頃より明治にかけて 12 台の水車が立地、最近まで稼動していたものもあったことなどが述べられている。key word 3「茶店」は、『三重町誌沿革編』（S41 年）の「文政 9 年に建てた碑は、野津町側の茶店の横に」という記述から、右岸上流橋詰に人の集まる「茶店」の存在がうかがえ、key word とした。

②遺跡調査

「遺跡調査」とは、現地の遺構や遺物、地形調査などに基づく歴史調査である。波津久氏の論文には架橋以前の渡りの遺構が虹澗橋付近の河川敷に現存することが述べられていたので、第 3 次現地調査の課題にした。

（3）第 3 次現地調査—key word の確認と地形調査

①key word の確認

key word 1「柳井瀬」は、地元住民へのヒアリングで確認した。地元では「柳井瀬橋（やないぜばし）」が通称で、80 才以上の古老は今でも「やないぜ_んはし」とよぶ。“_ん” は地元の方言で「～にある」を表すので、「柳井瀬橋」は「柳井瀬という場所にある橋」という意である。「虹澗橋」は「澗（山と山との間にある水流）に架かる虹のような形の橋」の意で、三重町では文化財として格付けする意図から石碑にかかれた「虹澗橋」を称すようになり、昭和 38 年 7 月、町の重要文化財指定のとき正式名称とした。虹澗橋には形を重視する“建造物”としての「虹澗橋」と、場所を重視する“遺跡”としての「柳井瀬橋」の 2 つの側面が共存することがわかる。

key word 2「三重川の渡り・水車群」は、郷土史家波津久氏の協力により、虹澗橋周辺の河川敷で架橋以前の旧道跡と明治 38 年～大正 2 年間に稼動していた精米用水車の石積み水路跡と建屋敷地の擁壁跡を確認した。水車へのアプローチは旧道を利用していた。

key word 3「茶店」（右岸上流）は、橋周辺に住む地元住民へのヒアリング（表-1）で、豆腐・味噌・菓子などを売る「雑貨屋」（S26～S55）であったことがわかった。右岸下流の橋詰は、明治～昭和中期まで、馬宿・魚の卸業、飲み屋などさまざまな「店屋」として利用された。右岸下流橋詰の排水口は、往還道の雨水排除を目的に設置されたもので、水路部分に残る石積み（空積み）から、橋本体と同時期の建設と推定される。左岸上流の橋詰にはかつて一本松があり、「一里木」（イチリギ）だったともいわれる。河川敷には、「井ノ子」（湧泉のこと）があり、旅人や馬宿が利用していた。

表-1 虹澗橋の橋詰空間・水辺空間の利用形態の変遷

	江戸後期	明治・大正	昭和戦前	戦中・戦後	昭和中期	現代
橋 詰	右岸上流	・石碑	・石碑 ・盆踊り （馬供養）	・石碑 ・住宅(?)	・石碑 ・飲み屋 ・雑貨屋	・石碑 ・空家
	右岸下流		・馬宿 ・魚の卸業	・住宅	・住宅	・住宅
	左岸上流	・排水口	・排水口	・排水口	・排水口	・排水口
	左岸下流	・松	・松	・松	・松	・松
河川敷		・水車 （精米業）		・砂利採取		
		・井ノ子(?) （湧泉）	・井ノ子 （湧泉）	・井ノ子 （湧泉）	・井ノ子 （湧泉）	・井ノ子 （湧泉）

②地形調査

地形調査は、歴史調査をかねるとともに、今回は周辺整備計画のための簡易測量もおこなった。

4. 歴史的コンセプトの提案

図-2 に虹澗橋周辺整備計画のコンセプトを示す。虹澗橋の架橋によって柳井瀬の橋空間には、2 本の道と 2 つの橋が存在したことになる。また石碑「虹澗橋記」では、人もよりつかない険しい場所という印象が強いが、現地調査によって実際の橋空間は、人々が集う「たまり空間」が時代に応じて現れたことがわかった。周辺整備計画では、これらの遺構と土地の歴史を継承し、あたらしい時代に対応した「橋空間」を創出したい。



図-2 虹澗橋周辺整備計画のコンセプト

5. まとめ

本研究は、「土地+もの」の評価視点から、「史実評価」と「遺跡調査」に区別した系統的な歴史調査をおこない、建造物評価ではあいまいであった土木遺産の場所と歴史の文脈を明らかにし、コンセプトに生かした。また建造物評価では評価対象にならない整備計画範囲の“土地”は、架橋前後の歴史的遺構が残る“複合遺跡”であることもわかった。今後は、得られたコンセプトを周辺整備計画の配置と形およびデザインにどのように生かすかが課題である。

本論文は、(財)前田記念工学振興財団の平成 12 年度研究助成をうけ、大分県、三重町・野津町の協力を得て作成した。謝意を表します。

注)堀川洋子・伊東孝「『近代土木遺産』の評価に関する一考察—発電用ダムの“近代遺跡”調査を事例として」(審査付論文)、『土木史研究』2001 年掲載予定